

○なぜ持続可能性を問うのか

持続可能性を問う最大の理由：現代の農業や水産業が持続可能性を失いつつあるから。

1980年代くらいまでは、環境と食料・農業は、独立して存在し、相互に矛盾することなく両立可能と考えられていたが、現在はそうではない。→環境・食料・農業は密接に関係している。

○地球環境変動と農業とのかかわり

21世紀前半における人類の最重要課題は、食料問題と地球環境問題。

理由1：第二次大戦後の驚異的な農業技術進歩にもかかわらず、栄養失調人口は一向に減らない。

理由2：食料生産に対する地球環境変動の影響が近年徐々に顕在化しつつある。

そこでまず、農業と食料の20世紀を簡単に振り返っておく。

- ・農業は本来、自然の力を最大限に生かし、物質循環メカニズムを取り組むことによって環境保全に寄与しうる産業。
- ・しかし、20世紀後半になると、先進国では化学資材をより多く投入し、大型機械によって単作化を進めてきたため、自然環境や生態系に対して負荷を増大させることになった。
- ・世界の農業が今後、食料を十分かつ安定的に供給できるかどうか、おおいに危惧されている。  
→農業は、地球環境を悪化させるひとつの原因に。

森林や草原の消滅・地球の温暖化・野生動物の絶滅・土壌侵食・砂漠化・農地の荒廃・地球温暖化・オゾン層破壊・酸性雨・水質汚濁・地下水の枯渇・食品安全性に対するリスク増大・社会不安・（日本では）後継者不足・中山間地域では耕作放棄地の増加……

日本農業は持続可能なのか。食卓はこのままで本当に安心できるのか。

○なぜ日本農業は「非持続的」なのか

1985年以降、日本農業の生産力は低下しはじめ、衰え続けている（水産業も同様）。

後継者不足・耕作放棄地の増加・自給率の低下・輸入に依存

現代日本の食料と農業のシステムは決して持続的ではなく、むしろ非持続的な様相を強めてきた。

①低すぎる食料自給率 ②大きすぎる環境負荷 ③高すぎる食品廃棄率

→できるだけ未利用資源を有効に活用し、農業生産の方法を低投入型・循環型へと転換することが求められる。今後の戦略として、次の3つを提案しておきたい。

- ①いかに環境への負荷が小さな生産方法を採用するか。
- ②農業や水産業が経済的、社会的に成り立つという条件づくりが必要。
- ③食の安全・安心が担保される必要があり、消費者の生産者・食品産業への信頼を高めうる条件づくりが重要。

### ○楽観できない食料需給の見通し

問：近未来、あるいは21世紀前半に食料危機は起きないのか

答：かなり厳しい。21世紀前半は、人口増加と経済成長による需要拡大に対して、供給が追いつけそうもない。食料不足、栄養失調の人口増、貧困と環境悪化の悪循環も危惧される。

理由：パラダイムの転換。新しい3つの構造変化が加わってきた。

①地球温暖化 ②バイオ燃料と食料との競合 ③食品リスクの拡大

食料安全保障に影響を与える要因として、5つの変数が示されている。

①人口増加 ②穀物需要の増加 ③生産基盤の不足、劣化 ④水資源の世界的枯渇 ⑤地球規模の環境変動

以上を総合すると、食料の需要は増えるのに、供給はあまり伸びないという見通し。

→市場価格は上昇→貧しい途上国の人々の食料難→栄養失調、飢餓人口の増加、格差の拡大という問題の顕在化。

このような状況が推測されるのに、日本は、大量の食料輸入を続けて、人道的に許されるのか。そもそも輸入し続けられるのか。

### ○地球温暖化の食料生産への影響

- ・ IPCC第二委員会の「第四次報告書」では、厳しい口調で地球温暖化の脅威を強く訴えている。
- ・ 食料供給に関連して、気温上昇と降雨量の変化にともなう「食料生産への悪影響」と「生態系の破壊」を指摘。→日本は、現在と同様に輸入をし続けることはできないだろう。

### ○バイオ燃料か食料か——食料安保のパラダイム転換

①地球温暖化による農水産業への影響と生産性低下の問題。→既出

②バイオマス燃料というエネルギー問題。

・ 小麦とトウモロコシの価格が高騰。原因は、食料向けの農地が、バイオ燃料向けへと大幅に転用されたこと。食料か燃料か。農産物の争奪戦が、地球規模で開始されたのである。

・ バイオ燃料は、化石燃料より環境面で優れている。しかし、そのために熱帯雨林を伐採したり、土壌劣化や生態系の破壊が行われたり、食べられない人が増えたり。

・ 「バイオ燃料の生産と貿易において守るべきルール」を筆者が提案。

ア、生産・加工・輸送プロセスでCO<sub>2</sub>排出量を追加的に増加させないこと。

イ、農地転用、森林伐採などによる生態系の破壊、土壌劣化など、新たな環境破壊を引き起こさないこと。

ウ、主食の確保という観点から、とくに零細農民や品構想の食料安全保障を脅かさないこと。

③食に関係する感染症の国際的拡大、つまり食品リスクの拡大。→次節

### ○食品リスクの拡大

O-157・鳥インフルエンザ・BSE・食品安全事故・偽装／不正表示問題・食中毒 等食のリスクがグローバル化している。→各国とも、危機管理システムの構築が求められる。

(対策) 個々の食品企業だけにとどまらず、産業界あるいは社会全体がいかにかに予防的にリスク管理を実行するか。

## ○日本農業の未来はどうなる

- ・日本の農業衰退の最大の理由は、担い手、とくに若い後継者がいないこと。  
→農業・農村にかかわる社会システム全体を見直し、抜本的な改革が必要。現代社会において農業・農村の果たす役割、そして都市住民のニーズや価値観の変化に注目したい。  
→これこそ、教育の、そしてESD実践者の役目！（山方案）
- ・稲作経営を活性化させるためにどのような戦略が有効なのか。  
→確かな安全・安心を軸とする実質的なブランド化、直売所への売り込みなどの多様な販売戦略、加工部門との連携など、消費者の声を今後の経営にぜひ生かしてほしい。
- ・農業の現場では
  - ア、できるかぎり環境負荷を抑えつつ
  - イ、自然資源を適正に管理し有効に活用する新しいシステムを構築すること
  - ウ、土や水や生物生態系など、自然資源をいかに健全な状態に保全管理
  - エ、農林水産業そのものの営みを通して、自然資源を豊かな状態に維持管理

## ○里山をどのように守ればよいのか

どうすれば里山を保全しながら、地域の再生と経済の活性化につなげることができるのであろうか。できれば、補助金に頼るのではなく、市場原理の枠組みのもとで、日本の農業・農村を活性化させることが望ましい。→できるかぎり地域資源を活用した就労の機会をつくるなど、健全な地域社会づくりは不可欠な要素となる。

国土の7割近くを占める中山間地域の多くは、確かに条件不利であり、市場競争、国際競争は厳しい。だからこそ耕作放棄地が増え続けている。→耕作放棄地や遊休水田の新しい活用法は？

（例）最近では農家が近くの水田や裏山での牛の放牧が増加。

→遊休水田を活用できる・畜産物の付加価値を増加できる・鳥獣害対策として有効

→これは明らかに低投入・持続型／省力・低コスト化／「安全」

当事者や地域のみでは限界もあり、中央と地方双方の政策支援は必要。その際、国民的な合意と消費者の理解を得る努力は不可欠。

これからの農業と地域経済の再生にむけて、それぞれの地域ごとに次の3つの視点から見直しを行うことが有効ではないかと考えている。

- ①農林水産業と資源・環境とのかかわり（環境負荷、リサイクル、生態系破壊）
- ②日本農業と私たちの食生活との関係（清算と消費との距離、栄養バランスなど）
- ③社会経済システムとしての農業・農村のあり方（資源の保全管理、担い手の確保、産業・雇用づくりなど）の見直し

これからの戦略的課題として次の3点を指摘しておきたい。

- ①生産技術の総点検と「安全証明」を具体化すること（トレーサビリティ）
- ②足元から農業と環境のつながりを見直すこと（地産地消）
- ③食生活の視点から農業のあり方を捉えること。

## ○私たち消費者にできること

環境と資源の保全に対して賢い消費者でありたい。

- ・必要なものしか買わない
- ・旬の食材を選ぶ
- ・原料や原産地の表示のチェック

スローフード運動：伝統的な食生活、食文化、食材の見直しがポイント

目標：地域の新鮮な食材を用いて、本当のおいしさを取り戻そう

子どもたちに本当の味を伝えよう

地域の農業を元気にしよう

地産地消、旬産旬消、土産土法が揃えば、鬼に金棒。

「食の豊かさとは何か」

20世紀：豊かな食が実現した。しかしそれは、単にモノとしての豊富さ。

近年：食卓のにぎやかさ

農業や水産業が持続可能であるという点

生産資源と生産現場の環境の健全性

最後に一言。「いただきます」の習慣は、大自然から食や命をいただくことへの感謝。それに加え、「お箸の先に何が見えますか」という問いかけの大切さを訴えてきた。「そこに豊かな環境が見えますか」「その食材をつくってくださった人の顔が見えますか」

→生産と消費との連携システムを日々の食卓のなかに実質的に構築していくこと、そこに日本の農業と水産業の持続性を確かなものにするとする道筋があるのではないか。

日本にある世界農業遺産一覧

都道府県	G I A H S名	認定制度の有無	主なブランド品	ブランドについて	
				既に確立されている	持続可能を目指すためブランド化
石川県	能登の里山里海		棚田米	○	○
			塩		
新潟県	トキと共生する佐渡の里山		認定米「トキと暮らす郷」		○
			棚田米		
静岡県	静岡の茶草場農法		静岡茶	○	
熊本県	阿蘇の草原の維持と持続的農業		野菜		○
			あか牛		○
			小国杉		○
大分県	クヌギとため池がつなぐ国東半島	○	乾しいたけ	○?	○?
			シチトウイ	○?	○?
			有機栽培米		○
			特別栽培米（食味○）		○
岐阜県	清流長良川の鮎～里川における人と鮎のつながり	○ 清流長良川の恵みの逸品	鮎	○	○
			鮎加工品	○	○
			農林産物	○	○
			伝統工芸品	○	○
和歌山県	みなべ・田辺の梅システム		・梅	○	
宮崎県	高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム		・		
			・しいたけ ・和牛 ・茶		